

あざみ 令和3年4月度特別作品

里の春

あざみ

春は鳥の声や彼岸桜をはじめとした花々が咲き、里は桃色の露がかかったように華やかにあります。家の裏には子エンジンや耕耘機の音が響き、人声も聞こえ、急に賑やかになります。穂やかを日に、しばらく切株に座って桃の花を眺めていますと、ふと、細見綾子先生の

ふだん着でふだんの心桃の花

が浮かびます。今、この美しさを世話する人が高齢化し、また、猪などの獣が荒らし、残すのが難しくなっています。四季折々の風物でいろんな感動をもらい、何げないことも、私にとっては大切な俳句の素材です。籠りがちな今、里山の移り変わりを俳句に詠めるのは、ほんとうに幸せです。この里山の自然環境をなんとか維持できないだろうかと思っています。

どの部屋も朝日の入りて梅匂ふ

杖をつく人の多くて梅の花

傘並び手のひらほどの春子をり

四方より花桃の風家に吹く

一夜漬の芥子菜香る朝の飯

杭を打つ音の響けり犬ふくり

春の蚊の井戸の縁より出てにけり

スイートピー替へたる水に映りをり

日もすがら無言で畑を打ちにけり

初音聞く夕餉仕度の手を止めて

《作品鑑賞》

村上正人

あざみさんは、お住まい近くの里山を普段から作品に詠まれている。このたびの「里の春」は、その里山を守りたいという思いを寄せて作品にされた。

どの部屋も朝日の入りて梅匂ふ

部屋に入る日差と梅の香がまだ肌寒い朝に滑々しい。

四方より花桃の風家に吹く

桃は災いを除き、福を招くと言い伝えられ、花桃の風が吹くだけでも心地よいものであるが、それが四方からというのは、ほんとうに羨ましい限りである。

日もすがら無言で畑を打ちにけり

家の裏手の畑であるのか。一日畑の土を掘り起こし、植え付けの準備をしている。「無言で」というのがいかにも畑打ちらしい作業光景である。

栄吉 令和3年4月度特別作品

鳥のはなし

栄吉

専門家によれば、広島市は多くの鳥を見ることができるところで、私の住む町は、中でも条件に恵まれたところであるらしい。確かに色々な鳥を見ることができ、適度な距離をとれば、一緒に歩くこともできる。そんな町にいても、情けないことに、鳥の識別ができていない名前が覚えられない。頑張ってはいるが、忘れる方が早い。溜息をついたら、窓を鳥の影が過った。

山裾を即かず離れず鶉かな

山寺や厠の窓に柿ひとつ

幼子の声に癡ちたる耐鶉

見上ぐれば見下ろしてくる冬鶉

バス停に馴染みの鳥や霜柱

手袋の煽られてる枝の光

咳やルーべで覗く工芸展

鷹飛べば刹那静まる河川敷

囁の雨音凌ぐ朝かな

景桜の蔭広がりにて乳母車

《作品鑑賞》

村上正人

栄吉さんは、作品の中にあまり鳥を詠まねなかったようだが、このたびの「鳥のはなし」では、鶉や耐鶉のような小鳥から、鶉そして猛禽の鷹まで登場する。その鳥らしさと栄吉さんならではのウィットに満ちた視点がそれぞれの句に感じられる。

山裾を即かず離れず鶉かな

里近くに現れる鶉の特徴を「山裾を即かず離れず」と表現しているのはとても面白い。

見上ぐれば見下ろしてくる冬鶉

海上を走行する船上では、視線の上を近づくでもなく離れるでもなく漂うように飛ぶ鶉がいる。こちらが見上げると向うも見下ろしているように感じる。鶉と作者の関係が目に浮かぶようである。

鷹飛べば刹那静まる河川敷

何かと人には迷惑がられる鶉も、天敵の鷹が飛ぶと蜘蛛の子を散らすようになくなる。河川敷に鷹匠が鷹を放つことで、それまでの鶉の喧騒がなくなる瞬間を「刹那静まる」と表現されているのだろうか。